

# 牡丹唐草

## 「富貴万代」

花



伊万里焼  
江戸中期 尺皿

唐草文様は、織物や仏教の装飾などとして、唐（中国）から伝えられました。

その唐草文様は、蔓草の這うように伸びる姿が、生命力の強さの象徴として賞でられ、色々な植物と組み合わせ描かれて参りました。

法隆寺の軒平瓦には「忍冬唐草」、薬師寺の本尊の台座（国宝）には、ギリシヤの「葡萄唐草」、そして正倉院宝物の多くには、「宝相華唐草」（花文様）が見られます。

鎌倉・室町時代になりますと、元・明からの陶磁器や織物が伝わり、そこに描かれていた美しい「牡丹唐草」や「菊唐草」などとの出合いがあり、それらをお手本として、江戸

時代の装飾文様は、花開いていったのでございます。

このお皿には、見事な「牡丹唐草」が描かれております。そして、「唐草」は、どこまでも伸びる事から、「長寿、延命」の象徴とされて参りました。しかし、もう一つの意味があり、それは蔓草の蔓が「蔓帯」と呼ばれており、その音が「万代」に通じるところから、「子孫繁栄」の意を掛けたのでございます。

そこで牡丹唐草文様は、「富貴な牡丹」と「万代の蔓草」とで、「富貴万代」の吉祥文様ともされております。

富貴唐代 八五



「牡丹に東ね熨斗・宝尽し」  
伊万里 志田焼 江戸後期 尺皿

「熨斗」とは、熨斗鮑の事で、鮑の肉を薄くはぎ、引き延ばして乾かしたもので、「熨斗」が「延し」に通じるとして「永続」「延命」を表わす。熨斗袋に付けられている。宝尽し文様は「宝鑰」（宝蔵の鍵）、宝珠（宝の玉）、隠れ笠。

「吉祥图案解題」

（昭和十五年・一九四〇年）



# 長春に蝶

花



お皿の絵には、**寿石に花と蝶**が描かれています。さて、「この花は、何の花」と問われると、多くの方は「**牡丹**」だと、お答えになります。実は私も、そう思い込んでおりました。

ところが、ある日、眺めていた絵手本の「**画本必要**」（宝暦元年・一七五一年刊）に、「**長春に蝶**」と題して、同じような花が描かれていました。よくよく見ると、葉の形が、牡丹のような切れ込みのある大形の葉ではありません。

そこで「**長春**」を調べてみると、四季咲きの「**庚申薔薇**」の事で、「花の咲く時期は、主に春だが、四季

を通じて花をつけるため、**長春花**と言う」とありました。中国原産のこの薔薇は、日本には古くに渡来したそうで、鎌倉時代の公家の藤原定家の日記「**明月記**」の中に、「**長春花**」の名が記されております。

建保元年（一二二三年）二月十六日  
 籬下 長春花 猶有紅藥

今も、垣根などからませたこの花を見かけると、それは美事な姿で、思わず見とれてしまいます。中国では、年中花をつけるため「**月季花**」とも呼ばれ、「**花の後様**」として愛でられてきたのも、納得でございます。

ところで「**庚申薔薇**」との漢字の名前は、江戸時代の絵手本には出て参りません。明治になってから使われるようになったとされています。その名前の由来には、諸説がありま



中路定年画「画本必要」（宝暦元年・一七五一年）

伊万里 志田焼  
 江戸後期 尺皿



ちょうしゆん じゆせき ちょう  
 「長春に寿石と蝶」  
 いまり しだやき かがみすりえ  
 伊万里 志田焼 型紙摺絵  
 明治初期 尺皿



こおりうめ ちょうしゆん ちょう  
 「氷梅に長春に蝶」  
 いまり しだやき  
 伊万里 志田焼  
 江戸後期 尺皿



ちょうしゆん ちょう  
 「長春に蝶」  
 いまり しだやき かがみすりえ  
 伊万里 志田焼 型紙摺絵  
 明治初期 一尺二寸皿



ちょうしゆん からこ  
 「長春に唐子」  
 いまり しだやき  
 伊万里 志田焼  
 江戸後期 尺皿



ちょうしゆん らんかん  
 「長春に欄干」  
 いまり しだやき  
 伊万里 志田焼  
 江戸後期 尺皿



けいさいえいせん うきよふうりゅうしよくが ふ  
 溪斎英泉画「浮世風流諸職画譜」  
 (天保八年・一八三七年)

すが、長春ちょうしゆんが訛なまって「こうしん」となり、それに干支えとの「庚申こうしん」（かのえさる）の字を当てられたとか……。

以前は「庚申こうしん薔薇ばら」と聞いても、その名前について、ピンと来なかったのですが、元の名前に出合え、素直に納得する事ができました。

# 太湖石「生涯の友」

花



伊万里焼  
江戸後期 八寸皿

お皿の絵の、芭蕉の根元に置かれている「庭石」は、「太湖石」でございます。太湖石は、もともと中国の太湖から多く産出した「石灰岩」で、永年、湖の水によって溶かされ、珍しい形になった奇石の事です。

古来その趣が好まれ、庭園に据えて觀賞されて参りました。特に文人には、これから先も変わる事なく、そこにあり続ける「寿石」として好まれました。それは、「生涯の友」をも意味し、絵画にも「太湖石図」として描かれ、賞されたのでございます。

このお皿には、「太湖石」のそばに、怪しい者が来ると、騒いで家人に知らせる「驚鳥」と、日の出、日の入りに、美しい声で時を知らせる「鶉」、そして破れてこそ風から

身を守る、「破れ芭蕉」が描かれ、見る人の心を安らかにしてくれます。

「吉祥図案解題」(昭和十五年・一九四〇年刊)に、お皿の絵の構図と似たような絵が、載っております。鳥は白頭鳥(鶉)、植物は長春(庚申薔薇)と違いますが、太湖石には、相通ずる味わいがあります。

太湖石は、日本においても岐阜県などで産出され、今も庭石や銘石として愛好されております。因みに、石灰岩が地下のマグマの熱を受け、熱変成して結晶質になったものが、「大理石」です。そして、その名の由来は、これまた中国雲南省の「大理」の地で産出されたから、との事でございます。



「菊水に太湖石」  
伊万里 志田焼  
江戸後期 尺皿

「吉祥図案解題」  
(昭和十五年・一九四〇年)



長春白頭

菊水伝説  
「長寿の願い」

花



伊万里 志田焼  
江戸後期 尺皿



伊万里焼  
江戸後期 尺皿



「新案模様集」  
(明治三十四年・一九〇一年)



伊万里焼  
江戸後期 尺皿

菊に水をあしらった「菊水文様」は、よく見かけるものですが、楠木正成公の家紋としても知られております。奈良時代に中国から伝わった菊は、花を水に浸して、その水を飲めば、長生きするとされて参りました。

その由来は、後漢の末(二世紀末)に、応劭が著わされた「風俗通」に記されており、そのあらましが、江戸中期の「絵本鶯宿梅」(元文五年・一七四〇年刊)に、次のように記されておりました。

「応劭、風俗通に云。南陽酈県、甘谷水あり。甘美なり。其山上に大菊あり。花水に落て山上より流くだる。其滋液を得もの、谷中に三千余家、井を穿ず此水を飲む。みな壽し。菊華は身を輕し、氣を益し、人を堅

強ならしむ」。

この説話から、平安の貴族の方々は、菊の節句の前日の、九月八日の夕方に、菊の花に真綿(絹の綿)を被せ、菊の香りと夜露を染み込ませました。そして翌朝、この菊の露を含んだ綿で肌を拭い、長寿を願われたとの事で、これが「菊のきせ綿」と言われるもので、その後「菊酒」を飲まれたのでございます。

# 鉄線

## 「強い結び付き」

花



伊万里 志田焼  
江戸後期 九寸皿

このお皿に描かれているお花は、室町時代に中国から渡来した、六弁花の「鉄線」でございます。

日本にも、この仲間では八弁の「風車」があり、近年多く見られる「クレマチス」（花弁数はさまざま）は、この鉄線と風車の二種から西洋で品種改良されました。近頃は、これら全体をひっくるめて、「鉄線」、または「クレマチス」とも呼ばれております。

鉄線の図柄は、桃山時代の頃から、着物などに描かれ、江戸時代になると、絵画や陶磁器などにも描かれるようになり、京焼の野々村仁清（江戸前期）も、「鉄線花文茶碗」に絵付けをされております。

さて、鉄線の原産地である中国では、「鉄線蓮」と呼ばれております。その意は、「鉄の針金のような、強くて硬い蔓を持った、気品のある蓮のごとし」でございます。誠に言い得て妙と感じ入ります。

そして、この硬い蔓を持つことから、「強い結び付き」の願いを込めて、花嫁衣装などにも描かれて参りました。

そんな訳で、このお皿も、江戸時代の女性が宴席などで目にされた時、女心の琴線に触れ、安らかな心になられた事でしょう。絵とは、誠に不思議な力を持っております。

我が家でも五種類程植えておりますが、北斎翁が、この花を選ばれたのも、その意味を知れば、納得でございます。



橘 保国画「画本山野草」  
(宝暦五年・一七五五年)



葛飾北斎画「北斎漫画 初編」  
(文化十一年・一八一四年)



くたにやき  
九谷焼  
幕末～明治前期 八寸皿

京都の平安神宮の神苑は、大きな池の周りに路を巡らし、築山や名石などで山水を表現した、池泉回遊式庭園でございます。

初夏になりますと、池には杜若、花菖蒲、睡蓮の花と共に、河骨の優しい五弁の花が咲き、色取りを添えてくれます。

そして、その葉は矢尻形で厚く、その艶やかさには、目を惹きつけられます。地下茎が白く、動物の背骨に似ていることから、河骨（または、川骨）と名付けられ、その根茎を漢方では「川骨」と呼び、止血・強壯剤として重宝されて参りました。

さて、このお皿の絵の構図によく似た絵が、江戸後期に出版された、「草木鳥獸諸職絵」

手本」(文政元年・一八一八年刊)に載っており、また、「北斎漫画」や「北斎画苑」(天保十四年・一八四三年刊)にも描かれており、河骨の図柄は、その可憐さ故、色々な分野の職業で用いられたようでございます。



紀朝臣敏著「草木鳥獸諸職絵手本」  
(文政元年・一八一八年)

葛飾北斎画  
「北斎画苑」  
(天保十四年・一八四三年)

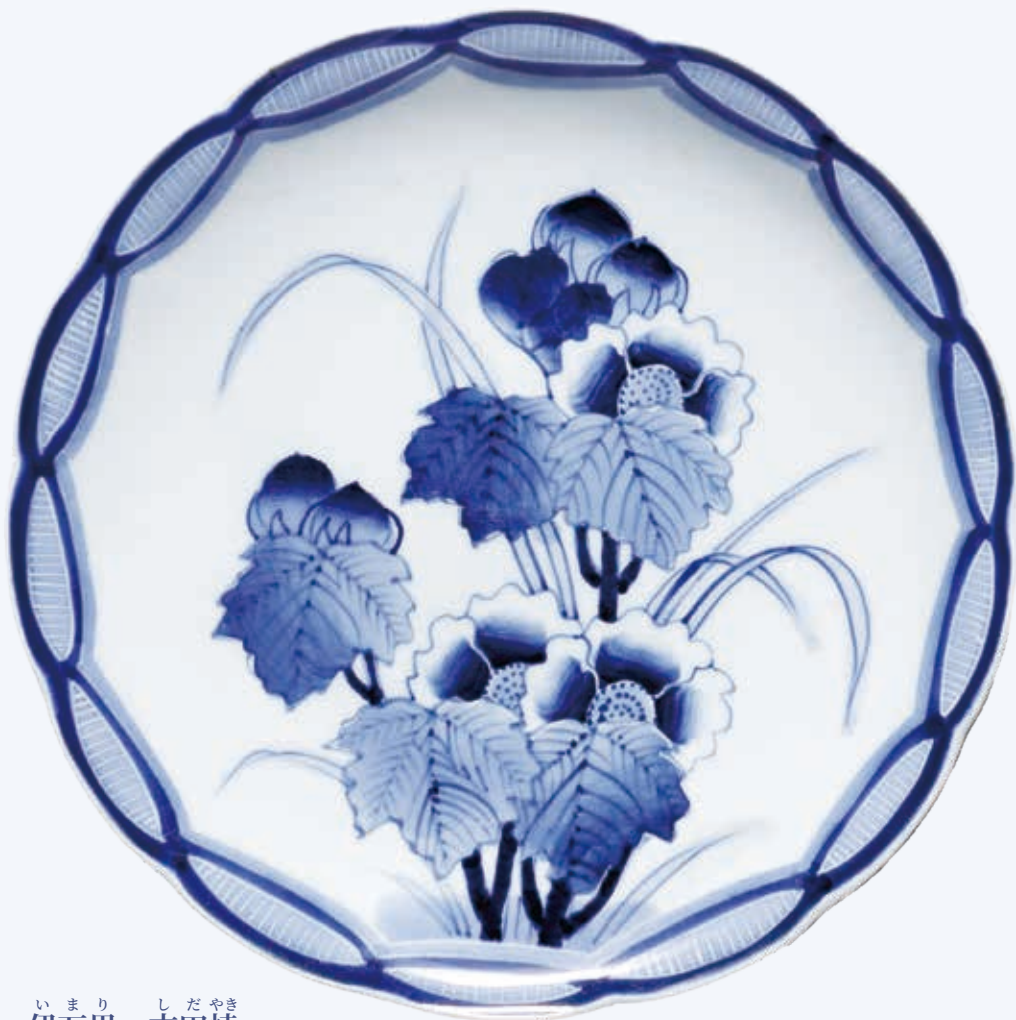


葛飾北斎画「北斎漫画 初編」  
(文化十一年・一八一四年)



# 立葵「葵の智」

花



伊万里 志田焼  
江戸中期 尺皿

このお皿には、「立葵」が描かれ、蘭のよ  
うな葉が添えられております。

江戸時代の寺子屋の教科書に、「実語教」  
があり、その絵入り本に、「実語教 稚絵解」  
(江戸後期刊)があります。この本の中には、  
お皿の絵と同じような立葵が描かれており、  
そこには、色々と教訓が記されておりました。  
そして、その中の「葵の智」の教えには、目  
から鱗が落ちる思いでございました。

それでは、その一部を現代文に改め、書き  
直しましたのでお楽しみください。

「左伝と言う本の中で、孔子は、『人の智は、  
葵の智にしかず』と説かれている。葵は、自  
分の足元をよく守っている。葵は、日がさし

たるもの、智なき時は、草木にもおよばざる  
なり」。

江戸時代の庶民向けの色々な本には、この  
ように「心を育てる」教訓的なものが、よく  
書かれております。それは、人々が争いもせ  
ず平安に暮らすためには、心学が、基とされ  
ていたからでございます。

寺子屋で「葵の智」を学ばれていたと思わ  
れる北斎翁も、「北斎漫画二編」(文化十二年・  
一八一五年刊)において、「はなあほい」(立

葵の別称)と題して、この花を選  
ばれております。お皿の絵の様子  
も、どこことなく北斎漫画に似てお  
り、そして、どちらの絵も「葉を  
傾け」て、太陽の熱を遮り、根を  
守っております。



葛飾北斎画「北斎漫画二編」  
(文化十二年・一八一五年)



歌川貞秀画  
「実語教 稚絵解」  
(嘉永五年・一八五二年)

てくると、葉を傾けて、根を被い、己を全う  
する事を知っている。しかるに、人として学  
ばざる愚人は、わが足元の事さえ悟らず、暗  
きに迷い、災いに至る事を知らない。これ人



# 仏手柑「悟道」

花



伊万里 志田焼  
江戸後期 尺皿

こらんのように、お皿に描かれたこの果実は、仏が手を合わせたような形をしておりま  
す。これを、「仏の手の柑橘」と、美称した  
のが「仏手柑」でございます。生食には向き  
ませんが、砂糖漬や甘露煮などにし、珍果と  
して賞味されております。

お釈迦様の国のインドから中国を経て、日  
本には、慶長（一五九六〜一六一五年）の頃に  
渡来したそうで、仏の道を悟った高潔さの表  
われとして「悟道」とも呼ばれ、生花や茶の  
湯の花として用いられて参りました。

商家では、それに加えて「末広がり」の形  
が喜ばれ、商売繁盛と多福の祈りを込めて、  
賞でられております。また、「音通い」とし  
ては、「仏」が「福」の音に、「手」が「寿」

小林永濯画「萬物雛形画譜」  
(明治十五年・一八八二年)



の音に通じるとして、「福寿」の寓意を含む  
とされております。  
さて、画題とされた「悟道」に思うのは、  
俗人にとって、悟りとは程遠いものですが、  
せめて「世俗から離れた胸中」を、時折持ち  
たいものでございます。



建部綾足画「寒葉斎画譜」  
(宝暦十二年・一七六二年)



徐熙筆  
悟道淨友  
大岡春卜写画 徐熙原画  
「和漢名画苑」  
(寛延三年・一七五〇年)

橘  
「絵本忘草」



伊万里 志田焼  
江戸後期 尺皿

このお皿の絵には、寒暖の別なく生い栄える、長寿瑞祥の「橘」に、「鶉」とおぼしき鳥が羽を休めており、どこことなく、ひな飾りで馴染みのある、京都御所の内裏の、「右近の橘」が、目に浮かんで参ります。

さて、江戸前期に出された「絵本忘草」(貞享五年・一六八八年刊)に橘についての謂れが、絵と共に記されておりました。諸説も色々ありますが、江戸時代の方々が繰り返し返して読まれた、その同じ思いでお楽しみ下さい。

《橘》

橘のはじまりは、人王十一代帝、仁明天皇の御時出きたりと日本記には伝る。此橘とよの国より三つ参らせしと也。折



愚獨著「絵本忘草」  
(貞享五年・一六八八年)

ふし后くわいにんなりしに、此橘を用い給ひければ、かいたいのなやみ、御心安かりなれば、朝夕是をねがひたまふ。其時くんしゆと云大臣、いこくに渡り、十の橘を取て奉る。此徳により、皇子御誕生にて、百二十年御位をたもち給ふ、くはかう天皇 是也。

ところで、妊婦の方々が柑橘類などの「酸いもの」を求めるのは、胎児の骨のためで、酸っぱいクエン酸がカルシウムの吸収を高めるからとされています。そこで、この橘の物語は、誠に自然の道理に適っており、御所の内裏に「右近の橘」が植えられたのも納得でございます。



伊万里焼 江戸後期 一尺三寸皿

お皿の絵のお手本になったと思われる絵が、江戸中期に出された「絵本直指宝」(延享二年・一七四五年刊)に載っております。そしてお題は「蓮華」とあり、鷺の表情や身のこなしも、よく似ております。

言葉としての「蓮華」は、中国語からの音読みですが、日本語を当てた訓読みでは、「蓮の華」となります。そして「花」と「華」の意味合いの違いは、「華はより美しいもの、すぐれた性質のたとえ」として使われるとの事で、蓮華が「君子花」と呼ばれるのも、然もありなんでしょう。

ところで、精進揚などのお料理で頂く「蓮の根」は、なぜ音読みの「蓮根」なのかと調べたところ、花を觀賞する蓮は、仏教と共に「泥中の蓮」の一文は、「蓮は泥より出でて、泥に染らず」を賞でたもので、「世俗の汚れにまみれず、清らかな心を保つ」との意たさうです。そして白鷺が共に描かれるのも、同じく泥に染らぬ純白の姿を、賞でられたのでございます。

さて、お皿や絵手本に描かれた蓮の葉には、虫に食べられているものも見られます。これもまた、生き物の命を重んじる、「不殺生」の思想に基づいております。そして、その葉の周りには、太湖石と呼ばれる寿石が長寿の寓意として描かれ、それに加えてお皿の周囲には、撓と実をつけた葡萄が彩られ、またまた豊穰と子孫繁栄を表わしております。

あらためてお皿の絵を眺めますと、その絵の中に「天の道理」と、仏の悟りとされる蓮華の香が漂っております。

伝わり、古くからあったようですが、食用の品種は、鎌倉時代に日本の曹洞宗の開祖であられる道元禪師が、中国から初めて持ち帰られたのだそうです。そのため、中国語ゆかりの「蓮根」との呼び方が、使われたと言う訳でございます。

そして、本来の日本名の「はす」は、花の後の種をつける実が、「蜂の巣」に似ている事から古くは「はちす」と呼ばれ、それが「はす」に変化したとされています。お皿や絵手本の絵にも、その蜂の巣のような実が描かれております。そして実には種の数も多く、人々は願いを込めて、豊穰と子孫繁栄の象徴ともされました。

また、仏教の經典の「維摩経」にあ

橘守国画「絵本直指宝」(延享二年・一七四五年)



# 蘇鉄

花



蘇鉄の原産地は、中国南部とも琉球諸島ともされておりますが、日本へは琉球から薩摩を経て、暖地の庭に植えられ賞でられて参りました。

中国では「鉄蕉」と呼ばれております。そして、琉球では「スチチ」などの里の呼び名があり、これが転じて「そてつ」と言う名前になったと、考えられております。

さて、「そてつ」には、木が弱った場合に鉄屑を与える、と、元気に蘇ると言う伝説がございます。その事から、江戸中期以降になりますと、「鉄」で

「蘇る」と掛けて、「蘇鉄」との当て字が見られるようになり、今に至っております。

その名前の流れを絵本で辿って見ますと、江戸前期の「訓蒙図彙」（寛文六年・一六六六年刊）に描かれた絵には、「鉄蕉、俗に云うそてつ」と、平仮名で記されております。

それから、およそ二十年後に出された、「絵本忘草」（貞享五年・一六八八年刊）には、「鉄蕉」の漢字に「鉄蕉」と、振り仮名がつけられております。

そして、その百年後の江戸中期に出された「頭書増補訓蒙図彙」（寛政元年・一七八九年刊）には、「鉄蕉は、蘇鉄なり」と、俗信から生まれた当て字である「蘇鉄」の文字が使われております。

伊万里 志田焼  
江戸後期 尺皿

下河辺拾水画 「頭書増補訓蒙図彙」  
（寛政元年・一七八九年）



「庭に蘇鉄」  
伊万里 志田焼  
江戸後期 尺皿



「屋敷に蘇鉄」  
伊万里焼  
江戸後期 尺皿



愚獨著「絵本忘草」  
(貞享五年・一六八八年)



それでは、「絵本忘草」に興味深い説明が記されておりましたのでお楽しみ下さい。

鐵蕉

鐵蕉は、唐物が近年にわたりたると見えたり。

和歌にも見えず、さつまの国に、おほくあり。この木つよきものにて、二年三年つしにほりをきても、めを出す。くろがねを、こやしとする。かるるときは、くきをさせば、めをいだすものなり。

さて、蘇鉄は燃えづらく、庭に植えると、火事から家を守るとして人気が出たようです。冒頭のお皿の絵には、守護神のような蘇鉄の傍に、「寿石」として賞でられる太湖石が見え、その手前に木瓜模様の刳形を施した欄干が、守るように描かれております。

# 七福神

## 七福神



あ ざら い ま り や き  
 合わせ皿 伊万里焼  
 江戸後期 合わせ寸法一尺七寸

七福神の絵が、いつ頃から描かれるようになったのか、その事について、大正十四年（一九二五年）刊の画題辞典に、「狩野松栄（桃山時代・一五九二年没）画く所、最も古しと伝えらる」と、書かれておりました。そして、それより少し前の室町時代後期には、京都の庶民の間で、「福の神信仰」が広がっていたそうです。

その頃、京都で評判の良い福の神は、「西宮の恵比寿」、「比叡山の大黒天」、「鞍馬の毘沙門天」、「竹生島の弁才天」と、「中国の布袋和尚」の五福神で、それに「道教の福祿寿」と、宋代の伝説人物に因むとされる「寿老人」が加えられ、七福神となったとされております。

その七福神が、全国的に広がりを見せた

きっかけは、徳川家康公に仕えられた政治指南役の天海僧正が、仏法の「七難即滅・七福即生」に因んだ七福神信仰を、家康公にお奨めになったからでございませう。

その七福とは、「寿老人の寿命」、「大黒の有福」、「福祿寿の人望」、「恵比寿の清廉」、「弁財天の愛敬」、「毘沙門天の威光」、「布袋の大量」との事で、この七徳をもって世を治める事を、説かれたのです。

きたがわはるなり  
 北川春成縮図  
 「扁額軌範」  
 （文政二年・一八一九年）



うたがわひろしげ うきよえさんぷあん  
 初代・歌川広重画「浮世画譜三編」  
 （天保年間）



ここでの布袋の大量は、「度量が広い」の意で、家康公はこの話をお聞きになり、早速、狩野探幽に絵を所望されました。その後、七福神は、各地の絵師にも描かれるようになり、その庶民信仰は全国に広がっていき、今に至っている訳でございます。

因みに、子供の成長を祝う「七五三」のように、「奇数」は割れる事がないため、縁起の良い「陽の数字」として賞でられて参りました。その七の意味でも「七福神」は愛されたのでございましょう。

さて、「北斎漫画」の初編（文化十一年・一八一四年刊）には、絵の練習をする唐子と共に、七福神の絵が、小気味好く描かれております。お皿の絵と見比べながら、お楽しみください。

葛飾北斎画「北斎漫画初編」  
（文化十一年・一八一四年）



【右列上から】  
恵比寿・毘沙門天・大黒天

【左列上から】  
弁財天・福祿寿・  
寿老人・布袋

# 大黒様の初夢

七福神

このお皿の絵は、何を意味しているのか、それが気になるところでございます。

何やら大きな袋を抱えている御仁は、眠っておられるように見受けられ、その傍らには「羽子と羽子板」、そして「若松」が描かれており、時は「正月」と見て取れます。

さて、大きな袋を持ち、頭巾を被っているお方と言えば、福神の大黒様が思い浮かんで参ります。その眠っている大黒様の頭の上には、富士山が霞と共に描かれております。そこでこの絵は、大黒様が袋（金囊）を枕にして、縁起の良い富士山の「初夢」を、見ていると言う訳でございます。

そして、大黒様の頭上に描かれている赤い

伊万里 志田焼  
江戸後期 尺皿



寺井重房画「画本拾葉」  
(宝暦元年・一七五一年)



大きな玉は、あらゆる願いを叶えてくれる「如意宝珠」。それに俵形（たわらがた）のものが「小判」、小さな長方形のものは「二分金」（二枚で一両）、そして豆粒（まめつぶ）のようなものは「豆板銀」で、当

時の通貨の金銀でございます。

この仄々としたお皿の絵を眺めていますと、大黒様が人々に愛されていた様子が伝わって参ります。

さて江戸中期の絵師「雪蕉齋」（寺井重房）が描かれた「画本拾葉」（宝暦元年・一七五一年刊）に、お皿の絵と同じような姿の大黒様が描かれており、どうやらこの絵を本にされたようでございます。

この頃の絵手本を出版する版元は、都の京都や大坂などの関西に多く、絵師も京都の「西川祐信」、大坂の「橘守国」、「大岡春卜」などの巨匠がおられ、栄えておりました。そして「雪蕉齋」は、その西川祐信の門人との事でございます。



はたら  
ふくじん  
くるまひ  
働く福神「車引き」



いまり しだやき  
江戸後期 尺皿  
伊万里 志田焼  
一尺一寸皿

このお皿には、遠くに富士山を望み、何やら荷車を引く恵比寿様と大黒様が描かれております。そして荷車には、大黒様が右手に持たれる「打出の小槌」が左の端に見え、それに大きな袋（金囊）と、あらゆる願いを叶えてくれると言う「宝珠」が積まれています。

さて、江戸時代のお皿の絵には、「働く福神」の姿が色々描かれております。このお皿の絵もその一つで、その意は、「働く事が福をもたらす」との教えでございます。そして、大黒様の「打出の小槌」は、士農工商それぞれが持つ道具の象徴だと、彼の貝原益軒も「百姓袋」（享保十六年・一七三二年刊）の中で次のように述べておられます。

小槌は。四民をのそのその産業の道具。

士は武具弓馬。農は耕作の具。鋤鋤の類をいふべし。工商もをのその職業の具を小槌といふ。此槌を用ゆるに懈る事なく。しかも一度に多く打出さんとする事なく。足ことを知て。少しづつ打出すが故に。小槌とは名付たり。

これを読んでつくづく思うのは、「心の学び」こそが、人々を迷いから救い、そこで初めて安らぎのある日々を送る事ができる、との事です。

「足ることを知りて、少しづつ打出す」

江戸時代の方々の笑顔は、「学びの笑顔」と見受けました。「北斎漫画十三編」（嘉永二年・一八四九年刊）においても、車引きが描かれております。



いまり しだやき  
江戸後期 尺皿  
伊万里 志田焼

かつしかほくさい  
葛飾北斎画  
「北斎漫画十三編」  
(嘉永二年・一八四九年)





伊万里 志田焼  
江戸後期 八寸皿

七福神のお一人の布袋和尚は、もともと唐の末(九〇〇年頃)に四明山に住んでおられた禅僧でございます。その姿は福々しく、大きな太鼓腹を出し、お顔は常に笑みを絶やさず、耳は福耳で、まさに円満の相でございます。のちに、諸国を放浪され、市中を歩き回っては、人の吉凶などを占い、特に天候の占いは的中したとされており、持ち歩かれた袋には、日用品や人々から喜捨されたものが入っているとの説と、気の長い寛容の精神が宿る、「堪忍袋」との説がございます。

禅宗では、布袋和尚は、弥勒菩薩の化身として崇められております。それも、権力欲や物欲を微塵も感じさせない、その風貌からして、納得でございます。

布袋

四明之僧也、形肥腹垂て額に皺あり。常に布の袋を杖にかけ、市中に入て物を乞ふ。布の袋を持つへ、名を布袋といふなり。

禅宗の人物画には、始祖の達磨大師をはじめ、寒山・拾得などが知られておりますが、布袋和尚もその一人で、これらの人物画の画意は、「悟道」(真理を悟る)でございます。

ところで、「尾形光琳」に私淑された「酒井抱一」は、光琳の絵を集め、「光琳百図」を出版されました。その中に、橘守国画伯の描かれた布袋に、そっくりな絵がありました。守国画伯も、二十一歳年上の光琳から学ばれたようでございます。

酒井抱一編 尾形光琳画  
「光琳百図」  
(文化十二年・一八一五年)



このお皿のお手本となった絵が、橘守国画伯の「絵本通宝志」(享保十四年・一七二九年刊)に載っており、そこには次のような説明がされております。



橘守国画「絵本通宝志」  
(享保十四年・一七二九年)

# 恵比須舞「英一蝶」

七福神



伊万里 志田焼  
明治初期 一尺一寸皿

「生類憐みの令」で知られる徳川五代將軍綱吉公の時代（一七〇〇年頃）、京都で医師の息子として生まれ、のちに父の江戸詰めに従い、一家と共に転居した少年がおりました。

彼は絵描きの才能があり、狩野派に学び絵師となりました。その画風は、「軽妙・洒脱」で、俳諧もよくし、芭蕉や其角、それに役者の市川團十郎などとも、親交を持つ程の人となりました。

しかし、四十代半ばに、幕府などの風刺画を描いたとして、三宅島への流罪となりました。島では、島民の求めに応じて、七福神や縁起絵などを描き、ゆとりある「家持ち流人」として慕われました。また、これらの絵を、富山の薬売りが買い漁り、江戸に持ち帰

る程の人気ぶりでした。

そして、綱吉公の逝去による大赦によって、十二年ぶりに江戸にお戻りになり、「英一蝶」と名乗られ、市井の風俗を描く人気絵師として名を残されました。

しかし、まだこの頃は、「絵手本」を出す程の出版技術がなく、英一蝶が出された絵手本はございません。そして一蝶が亡くなられてからおよそ四十五年後に、一蝶の画風を慕い、その「粉本」（下書きの手本など）を収集し続けた方がおられました。与力職で、絵師としても名手として知られた「鈴木鄰松」がその人で、「一蝶画譜」（明和七年・一七七〇年刊）を世に出されました。因みにこの時、北斎翁はまだ数え年十一歳の少年でした。

さて、鄰松がおられなければ、また絵手本



（左右を反転）  
鍬形蕙斎画  
「諸職画鑑」  
（寛政七年・一七九五年序）



鈴木鄰松写画 英一蝶原画  
「一蝶画譜」  
（明和七年・一七七〇年）

を作る**版本**の技術がなければ、**英一蝶**の絵を、たやすく見られる事は、なかつたでしょう。

さて、「一蝶画譜」の出版から二十五年後、北斎翁と並び称された**鋸形蕙斎**（当時は**北尾政美**）が、絵手本の「**諸職画鑑**」（寛政七年・一七九五年刊）を出されました。その中に、「一蝶譜」の**恵比須**の絵をもとにしたものがあり、その絵を反転させて見ると、お皿の絵とそっくりでした。

このお皿の絵は、明治の初めに**絵型彫師**の切り抜いた**型紙**を使い、写したもので、

その技法は「**型紙摺絵**」と言われるものです。

さすがこの絵も「**軽妙洒脱**」です。さてさてこの**鯛**は、三宅島での鯛でありましょうか。

ところで、英一蝶より六歳年下の**尾形光琳**も、「**恵比須舞**」を描かれておられます。その足の**捌き方**などは、そっくりです。この絵もまた、光琳の画風を慕い、光琳の絵を集められた**酒井抱一**が、私家版として出された「**光琳百図**」に載っております。



伊万里焼  
江戸後期 尺皿



酒井抱一編 尾形光琳画  
「光琳百図後編」  
(文政九年・一八二六年)